

## F S P に基づくテキスト類型論

本 城 二 郎

### 1. 序論 — F(unctional) S(entence) P(erspective) 理論の主要概念の概要:

およそ伝達の最小単位としての発話は、その基本的な文法的構成として文という形式を示すと考えることが一般的である。その場合、文の集合体で一貫したテーマ発展（後述するTHEME-RHEME連鎖）を構成するもののみを所謂テキストと見なすことが可能である。そこで、基本単位としての文の内部の構成を出発点とすれば、文のTHEME-RHEME分割の原理を発見することが重要となる。その様な発話を構成する為の文の構成原則を通常 Functional Sentence Perspective (略して FSP) と呼ぶ。FSP 理論の議論は次のような認知論的に妥当と考えられるテーゼが出発点である。

「文（節）要素は談話の発展に対して一様に寄与することはない／伝達論的な重要度において多様な相違を示す／と考えられる。」（Svoboda(1983), p. 49）  
例えば、下に所謂典型的な物語テキスト冒頭部分があるが、それらの類型論的に異なる3言語の対照比較は、幾つかの重要な FSP 基本的概念の妥当性を示している。

Once there was a king. The king had three sons. He loved them so much.

/ He /                      /They were so much loved by him. /

Byl jednou jeden král. Ten král měl tři syny. (On) miluje je velice.

/ (On) /                      /Velice je miluje. /

昔、王様がいた。（王には）息子が3人いた。（王は）3人をととても愛していた。  
／3人は（王に）とても愛されていた。／

冒頭文中の a king/jeden král/ 王様/ は相対的に重要な要素であり、それを受ける第2文と第3文中ではそれぞれ、The king, He/Ten král, (On)/（王には）/ 及び He/(On)/（王は）/ の様に相対的に重要でない要素に変化していることが分かる。

（ここでは、重要な要素をRHEME、重要でない要素をTHEMEとしておく。）別の要素で第2文中に登場する three sons/tři syny/ 息子が3人/ は第3文中では同様な変化を示しそれぞれ them, they/je/ 3人を、3人は/ となっている。形態上の変化はともかくとして、ここでは、要素の語順の位置や意味（役割）に関係なく、純粹に文脈（条件）のみにより、即ち既知とするか未知とするかという条件のみで2

つの名詞的要素の重要度が決定されているように思える。勿論、既知どうし、未知どうしの場合の重要度決定には、別の要因が関与しているのである。例えば、第3文中の動詞要素は、最重要の要素とみなし、他の2つの名詞句要素はともに既知ではあるが、重要度に関しては同一ではなく、差があると考えることが妥当であろう。即ち、文の意味構造における意味役割が、重要度の決定に関与的であると考えられる。その際、属性の担い手 (QUALITY BEARER) となるか、属性 (QUALITY) となるかで、相対的に後者が前者よりも重要度が高いという意味的一般化 (後述のフィルバスの意味スケールの1つ) による重要度決定が可能となるのである。具体的には、He<them, They<him/(On)<je, je<-uje/ (王は) < 3人を, 3人は< (王に) という重要度の差に関する2つのバリエーションを表示することがかくなるのである。(それぞれ、QUALITY BEARER<QUALITYという読みを示している。)

以上の観察より、次にあげるFSP 諸概念の一般化の妥当性が提出されるのである。

C(ommunicative) D(ynamism)度 ‘伝達動力度’ という概念の発見

「CD度とは文要素が伝達の発展に寄与する相対的な程度」(同上, p. 49)

即ち、いかなる文要素にも異なるCD度が付与されていると考えられるのである。その際、文要素のCD度決定に関与的な3要因およびその相互関係が以下の様になる。

「文要素のCD度は、FSP の3要因、つまり (階層的に他より上位の) 文脈、意味、線条性の相互作用の結果により決定される。」(Svoboda(1983), p. 49)

FSP 3 要因の階層性: 文脈>意味>線条性

線条性は現実的に語順と同一

印欧語は、最高のCD度を担う要素を文尾に置く傾向有り (チェコ語に典型的)

それを文頭に置くと、有標と見なされる。⇒FSP 原則による語順

英語における最高CD度の文頭語は、文法原則による語順の逸脱と考えられる。

意味 (内容) は、例えば定動詞の時制・様相表示子 (TME) が、文脈の作用しない条件で、文中の語順位置 (つまり線条性) に無関係に常に中位のCD度を担う。

文脈の抵抗がなければ、文要素の意味内容はCD度の漸進的上昇に向かう。

フィルバスの文脈独立意味スケールの2タイプ:

A-scale: SCENE (Settings) → APPEARANCE → PHENOMENON appearing on the scene  
/EXISTENCE /existing

Q-scale: QUALITY BEARER → QUALITY → SPECIFICATION → FURTHER SPECIFICATION(S)  
(permanent/transient)

↓ 合併スケール

Set → AP/EX → PH(=)QB → Q<sub>p/tr</sub> → SP → FSP [図1]

文脈は、CD度決定の関与性から、次の3種が区別される:

経験文脈 / 一般経験 / > 状況文脈 / 直接経験 / > 言語文脈 / 先行文脈 /

hyper- strings\*: hyper- が作りだす文脈strings で、連続する節どうしに見られる指示の同一性・類似性の関係を示す文脈結合により保証される。〔図2〕フィルバスの意味スケールと上記の伝達単位の斬進的發展を結合すると以下になる。

Set(Adv. T<sub>a</sub>)-AP(Tr)-PH(R)/QB(S-O T<sub>a</sub>)-Q(Tr)-SP(R) 〔図3〕

フィルバスの意味スケール發展に関しては、後のテキストの実例分析で若干触れるが、先験的にはA-scaleがテキスト冒頭部分で好まれることが予想される。

さて次に、文の連鎖としてのテーマ發展についての議論を概観してみる。既述の如く文のTHEME-RHEME 連鎖は、伝達発話としてのテキスト構成の基本原則とみなすことが出来る。その場合、一般的にはテーマ要素の連鎖が中核となり、以下の様な概念化、分類が可能である。

テーマ發展 (Thematic Progression:TP): ‘発話テーマの選択と順序付け、その連鎖と階層性、及びより上位のテキスト単位 (パラグラフ、章など) やテキスト全体や状況への関連性’ (Daneš(1974), p. 114)

その際、次の3つの基準で、TPの基本類型を分類することが可能である:

テーマ化 ——— R, T, 発話全体 (全T-T ネクサス), テキスト合間部分  
 テーマ化された意味部分 ——— 繰り返し, 派生  
 テーマ化される部分 ——— 直前 (コンタクト), 隔離 (ディスタント)

その結果、(5つの基本タイプから派生される) 7つのタイプのTPが提出される。

- (1a) レーマのテーマ化連結:  $T_{i+1} = R_i$   
 (1b) レーマのテーマ化派生連結:  $T_{i+1} < R_i$  } SYNTAGMATIC 軸上テキスト連結  
 (2) 発話のテーマ化連結:  $T_{i+1} = V_i$  (V: 発話)  
 (3a) テーマ連続:  $T_{i+1} = T_i$   
 (3b) 派生テーマ連続:  $T_{i+1} < T_i$  } PARADIGMATIC 軸上テキスト連結  
 (4) ハイパー・テーマよりの派生:  $T_{i+1} < T^*$   
 (5) テーマの要約:  $T_{i+1} = I_{i-n}$  (I: テキスト・インターバル) 〔図4〕

／例／ 「国立博物館は バーツラフ広場に建っている。」\*

T<sub>1</sub> R<sub>1</sub> ↓ 可能な連続

「この広場はプラハの最もにぎわった場所の一つです。」\*

T<sub>2</sub>(= R<sub>1</sub>) R<sub>2</sub>

「この大きな敷地の山の部分は優れた美に達している。」\*

T<sub>2</sub>(< R<sub>1</sub>) R<sub>2</sub>

「この事実はプラハを訪問する人達めいめいに知られている。」\*

T<sub>2</sub>(= V<sub>1</sub>) R<sub>2</sub>

「それはとても記憶に残る建物です。」\*

T<sub>2</sub>(= T<sub>1</sub>) R<sub>2</sub>

「国立博物館のコレクションは重大な国民文化の価値を示している。」\*

$T_2(<T_1)$

$R_2$

「他の極めて重大なプラハの建物、国民劇場はスメタナ河岸にある。」\*

$T_2(<T^*)$

$R_2$

\*印の「」付文は、Daneš(1987), p. 687 所収チェコ語例文の拙訳。

\*基本タイプ (1a), (2a), (4) は以下の様な 2 次元図式表示が可能。

(1a):  $T_1 \rightarrow R_1$

(Daneš(1974). pp. 118-9)

↓

$T_2(=R_1) \rightarrow R_2$

↓

$T_3(=R_2) \rightarrow R_3$

(2a):  $T_1 \rightarrow R_1$

↓

$T_1 \rightarrow R_2$

↓

$T_1 \rightarrow R_3$

(4):

$T_1 \leftrightarrow R_1$

$[T]$

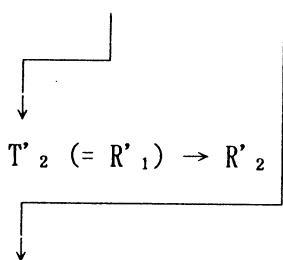
$T_2 \rightarrow R_2$

$T_3 \rightarrow R_3$

〔図 5〕

高次の TP もあり、例えば以下の様に (1a) の変化タイプとしての発展を示す：

$T_1 \rightarrow R_1 (= R'_1 + R''_1)$  / 例 /



$T''_2 (= R''_1) \rightarrow R''_2$

「19世紀の初頭に、2人の偉大な人物が天文学の新しい発展の基礎を築いた。J. Kepler は理論天文学を確立した。彼は、観察から、、、を推論する事が可能なことを示した。G. Galilei は力学を確立した。」

(Daneš(1987), p. 690 所収のチェコ語拙訳)

他の変化タイプとしてテーマ飛び越しの TPが考えられているが、これは (1a) の一種の変化タイプとみなす。これは詩文、ドラマ、対話文に多い。

発話 (又は FSP) レベルにも (文法・意味レベルにもある様な)、単一発話とテキスト構成発話 (つまり、上記の基本 7 タイプ) との間に、移行的な特徴、つまり (文法形式的に) 単一発話でありながら (機能論的には) テキスト的特徴をもっている様な複合タイプが存在する：

Wöhler zahříval kyanid amonný a shledal, že se tím změnil na močovinu, dříve známou pouze jako produkt živých organismů.

(a) Wöhler zahříval kyanid amonný.

(b) Shledal, že se tím změnil na močovinu. [独立性を失うが T-R 構造保持]

3 文脈が与える一般文脈条件を広場面(Broad scene) と呼び、発話の瞬間に話者(書き手) の直接伝達意思が与える文脈条件を狭場面(Narrow scene) と呼ぶ。

文脈条件は、文の機能する次の 3 つのレベルに分類される。

基本インスタンス・レベル／全要素文脈独立、意味と線条性のみがCD度決定／  
通常インスタンス・レベル／1 つ以上の要素文脈依存、3 手段全部がCD度決定／  
二次的インスタンス・レベル／1 つを除く全要素文脈依存、意味と線条性不在／

以上より、CD度を担う要素が示す配列の‘場’として文が規定されることになる。

「文(節)とは、多様なCD度が文要素上に分布する条件を文法・意味構造により与えられる様な‘伝達(分布)場’である。」(Svoboda(1981), p. 4)

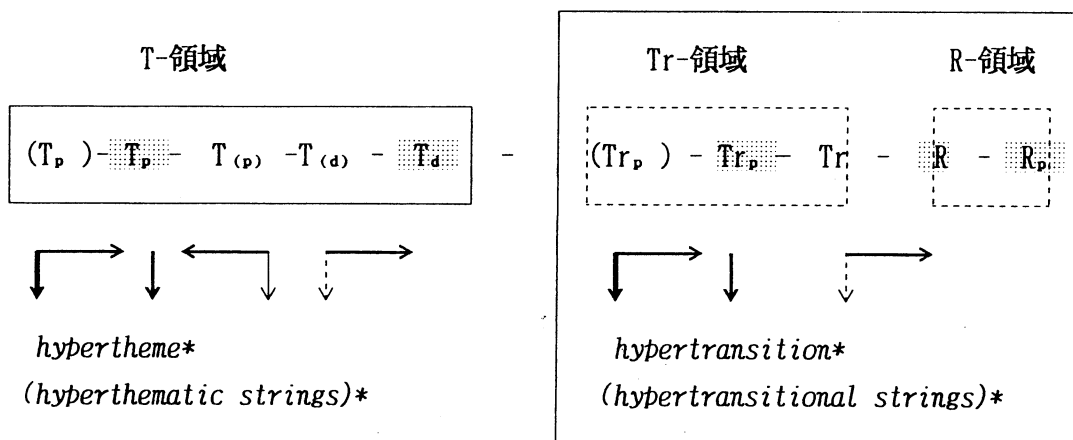
さらに、‘伝達場’としての文を構成する‘伝達単位’の設定も可能になる。

「(形態素から節にわたる) 全ての文要素は、CD度の担い手になり、同じ階層レベルに現れれば、それらを‘伝達単位’と呼ぶ。」(Svoboda(1968))

次に、文(節)レベル上の‘伝達単位’の類別を具体化すると以下ようになる。

2 つの伝達単位(つまり、定動詞の概念部分により表されるものと、TME により表されるもの) に分割される述語動詞を除き、大部分統語単位と一致するとみなす。

統計的には、TME により表される伝達単位が最も安定し、(それより低いCD度の単位を示す) テーマ単位と(同じかそれより高いCD度の単位を示す) 非テーマ単位とを分ける境界を示す(中位のCD度の単位を示す)  $Tr_p$  (トランジション・プロパー) と呼ばれる。これを中心にして、他の要素(単位)を相対的に特徴付けると以下の様になる: ( $T_p$ ):ellipted themes proper;  $T_p$ :themes proper;  $T_{(p)}$ :theme-proper oriented themes;  $T_{(d)}$ :diatheme-oriented themes;  $T_d$ :diatheme; ( $Tr_p$ ):ellipted transition proper;  $Tr_p$ :transition proper;  $Tr$ :transition;  $R$ :rheme(non-proper);  $R_p$ :rheme proper



hyper- \* : ‘言語外的指示の変更なく 2 つ以上の節からなる T-/Tr-領域内にとどまる要素’ (Svoboda(1981), p. 6)

(c) Tato látka byla dříve známa pouze jako produkt živých organismů.

〔独立性もT-R 構造も失うテーマ化により (b) の  $R_2$  と共に複合R を構成〕  
一般的には、T-R 構造の結合様式に従って発話は次の3タイプに分けられる：

単一発話：一つのT-R 構造

複合発話：2つ以上のT-R 構造が1文内に入る

圧縮発話：2つ以上のT-R 構造が幾つかの要素を共有する場合、一方の発話全体が、(テーマ化により) 複合T に、又は(レマ化により) 複合R に圧縮される  
／ $V_2$ のレマ化により出来た圧縮発話の例／

Při tomto procesu ( $T_1$ ) vzniká sirnít vápenatý, vyplouvající pak lehce na povrch železa ( $R^*$ ).

／ $V_1$ のテーマ化により出来た圧縮発話の例／

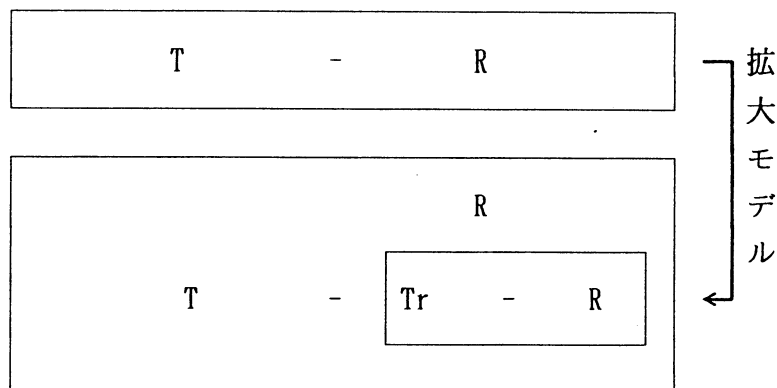
Při tomto procesu vznikající sirník vápenatý ( $T^*$ ) vyplouvá pak lehce na povrch železa ( $R_2$ ).

／ $T_2 = T_1$  の条件で出来た圧縮発話の例／

Z této temně zbarvené tekutiny, známé jako ropa (surová nafta) ( $T^*$ ) se vyrábí benzín a mnoho jiných produktů ( $R_2$ ).

## 2. テキスト分析におけるプラハ学派 FSPモデル諸研究の概観：2分割か3分割か？

テキスト構造を規定する、最も基本的な結束性 (COHESION/COHERANCE) という要因を比較的明示的に定式化 (又はモデル化) することは可能であるし、そのような研究の試みも特に今世紀後半のテキスト言語学の分野で数多くなされてきた。しかし、残念なことに、このテキスト構成要因の特徴付けや類型化を、一個別言語体系内においても、ましてや通言語的にも完成した研究グループは現れていないようである。一方、筆者が既に取り上げたFSPモデルに基づく諸研究は、主として文、節、発話レベルのそれであって、マクロな構造としてのテキストおよび談話構造における結束性の要因を、ミクロまたはメゾ構造との平行な関係を反映した統一的な分析モデルで説明しえていないように思える。比較的最近、60年代から以降、プラハ学派のFSP研究グループをリードしてきた2学者、F. Daneš, J. Firbas およびそのグループは、上記の課題に対し、かなり明確な説明原理を提出してきたことはよく知られている。前者のTP (テーマ発展) のモデル、後者のCD度に基づく文構成 (FSP) のモデルがそれであり、今や言語学における言語分析モデルを代表するものといえる。しかし、両者には若干の点で、特にアプローチの面で顕著な相違を見せている。前者の2分割法 (T-R)、後者の3分割法 (T-Tr-R) がそれであるが、筆者は2分割を基本とする拡大2分割分析法を考えられるベストとする。それは実際、上記のT-Tr-Rも2分割法 (T-R) の拡大モデルと見なせるからである。



この様な認識で、3分割法をマクロ構造からミクロ構造まで、統一的分析原理として徹底させてきているのが、プラハ学派第3世代の一人で、上記 Firbas のグループで有力な弟子の A. Svoboda である。彼の FSP分析統合モデルの全容については、Svoboda (1989)に詳しいので、ここではそれに立ち入らないことにする。

筆者の当研究発表の目的は、テキスト構成のレベル上のFSP 要素 (T, R, Tr等) が、他のレベル、すなわち意味レベルや統語レベル上の諸要素と如何に関係づけられるのかを見ようという大胆な試みの第一歩であり、より広い一般化に向け通言語的な網の目—具体的には、英語、チェコ語、日本語の3言語対照—を通して初めて理論的妥当性が実証されるのである。そのため、本論では第3部で3言語 (の意味的等価テキスト部分) の若干の実例分析提示および観察にとどめたいと思う。上記の目的を達成するための分析モデルとしては、とりあえずは最も生産的な結果を出している Svoboda (1981) のモデルを利用し、必要があれば若干の修正を加えることにする。とりわけ、Honjo (1983)で使用した改訂版フィルバスの意味スケール (文脈、意味、統語の3レベル統合スケール) などの開発が今後望まれるところである。

### 3. テキスト類型の発見に向けての3言語テキストTP構造の対照分析

使用するテキスト本文は、意味的に等価であり、全て先行文脈より独立していると思ふことのできる、聖書の物語冒頭文とそれに続く文脈結合のある数文 (パラグラフ) である。文体的な変異をも考慮し、版は現代口語版に限定する必要があった。この研究は、筆者によるFSP 語順分析法の開発 (Honjo(1983))の延長線上に位置づけられ、FSP テキスト分析法完成への第一歩と理解されたい。

類型1 : /SCENE-EX-PH/ ⇔ /QB-Q-SP/

E: ..... Once there were ten girls | who took their oil lamps  
(MATTHEW XXV.1-5)... .....  
T(p) Tp Trp and ..... Rp .....  
.....  
(Tp) .....  
went out to meet the bridegroom.  
.....

[注]

Five of them were foolish,  
 ...:(T<sub>p</sub>)/T<sub>p</sub>/T<sub>(p)</sub>  
 ...:T<sub>(d)</sub>/T<sub>d</sub>  
 ...:(tr<sub>p</sub>)/tr<sub>p</sub>/tr  
 ...:R/R<sub>p</sub>  
 and the other five were wise.  
 The foolish ones took their lamps  
 but ..... did not take any extra oil  
 ..... with them,  
 while the wise ones took containers full of oil  
 ..... for their lamps.  
 The bridegroom was late in coming,  
 .....  
 so the girls began to nod and fall asleep.

CZ: ..... jako když  
 (MATOUŠ XXV. 1-5)

deset družiček vzalo lampy  
 .....  
 a ..... vyšlo naproti ženichovi.  
 .....  
 Pět z nich bylo pošetilých  
 .....  
 a pět ..... rozumných.  
 .....  
 Pošetilé vzaly lampy,  
 .....  
 ale ..... nevzaly si s sebou olej.  
 .....  
 Rozumné si vzaly s lampami i olej  
 ..... v nádobkách.  
 když ženich ne přicházel,  
 .....  
 na všechny přišla ospalost a usnuly.

J : ..... 十人のおとめが ..... それぞれ あかりを 手にして  
 (マタイ XXV.1-5) .....  
 ..... 花婿を迎えに 出ていく .....。





40-42) ..... ひざまずいて 言った、「.....」。  
 ..... =====

/QB-Q-SP/ ⇔ /QB-Q-SP/ : 2 例中 2 例 (チェコ語は 0 例)

R → T<sub>P</sub> : 2 例

上記の分析結果より、物語冒頭部分に代表される文脈独立テキストに関する以下の結論を抽出することが可能である。

〔結論〕①傾向的特徴として、現象スケール(SCENE-EX-PH)で導入し、属性スケール(QB-Q-SP)で引き継ぐという流れが通言語的にも一般的である。その場合、冒頭文レーマ要素の第2文でのダイア・テーマ化(T<sub>d</sub>)の方が、テーマ・プロパー化(T<sub>p</sub>)より相対的に好まれる。

②属性スケールでの導入は、(屈折語尾による自由語順を持つ)チェコ語を除き、(文法的制約を持つ)英語・日本語は共に同一スケールで受ける。

〔参考文献〕

- Daneš, F. (1974): Papers on Functional Sentence Perspective. Academia: Mouton.
- Daneš, F. (1974): "Functional sentence perspective and the organization of the text", in Daneš (1974), pp. 88-106.
- Daneš, F. (1985): Věta a text. Academia/ Praha.
- Daneš, F. (ed.) (1987): Mluvnice češtiny 3 skladba. Academia/Praha.
- Firbas, J. (1981): "Scene and Perspective", Brno Studies in English 14.
- Honjo, J. (1983): 「FSP 理論に基づく語順分析」("Towards a Word Order Analysis Based on Functional Sentence Perspective"), in Studies in Linguistic Expression No. 2, the Linguistic Expressional Society of Hyogo University of Teacher Education.
- Svoboda, A. (1981): Diatheme. Univerzita j. e. Purkyne v Brne.
- Svoboda, A. (1983): "Thematic elements", in BSE 15, pp. 49-86.
- Svoboda, A. (1989): Kapitoly z funkční syntaxe. SPN/Ostrava.

〔使用テキスト〕

- Good News New Testament in Today's English Version. American Bible Society, New York, 1976.
- BIBLÉ: Písmo svaté Starého a Nového zákona. Ekumenický překlad. UCN, Praha, 1979.
- 『新約聖書—口語訳』(Japanese-English New Testament). 日本聖書協会 (Japan Bible Society), Tokyo, 1980.